

中学生の規範意識と学校適応
－性差・学年差に着目して－

向 井 隆 代

Attitudes toward problem behavior and adjustment to school in junior high school students

The present study aimed to clarify attitudes toward problem behavior in junior high school students and their relationship with school adjustment, exploring differences by gender and grade. A total of 683 junior high school students responded to anonymous questionnaires assessing attitudes toward problem behavior, satisfaction in class, and perceived stress in school. Older students were more likely than younger students to find problem behavior acceptable, a finding that partially replicates those of previous studies. More girls than boys reported less-serious problem behavior, such as snacking in school and using cell phones during class, as acceptable. Overall, better school adjustment—as shown in greater academic motivation and a more favorable relationship with teachers—predicted less-tolerant attitudes toward problem behavior in both boys and girls. However, the causal relationships between attitudes toward and engagement in problem behavior remain inconclusive. The results were discussed in terms of their implications for preventive education for problem behavior in school.

1. 問題と目的

近年、暴力行為や逸脱行動など青少年による問題行動の増加が指摘され、社会問題としてさまざまな方面より検討がなされている。青少年による問題行動は少年犯罪などに関わる一部の非行少年にのみあてはまる問題ではなく、青少年全体の傾向として問題行動の増加が認められることは統計調査からもうかがえる。たとえば日本とアメリカ、中国、韓国の中学生・高校生を対象とした日本青少年研究所の調査報告（2009）によれば、日本では暴力や言葉の暴力が1997年からの10年間で増加しているという。また、同じ調査において、「人の物を取る」「公共の物を壊す」といった行動に対する規範意識も日本の中学生高校生は他国の生徒よりも低いことが報告されている。文部科学省の児童生徒の問題行動等に関する調査（2013）においても、年度によって増減はあるものの、いずれの問題行動にも特に減少の兆しはみられない。青少年の問題に関しては、以前は犯罪や非行など臨床的観点による事例研究が中心であったが、問題行動の多様化を受け、近年では一般の青少年を対象として予防教育的な視点に基づく研究も行われるようになってきた。少子化により、少年事件の件数は減少傾向にあるものの、再犯率は高く、以前にもまして予防教育の重要性が指摘されている。問題行動の背景には、青少年を取り巻く家庭や地域の環境の変化に加え、情報化社会の進展などさまざまな要因が示唆されている（鮎川，2001）。これまでの研究では、中学生・高校生の問題行動の関連因子として、親密でない親子関係（向井，2008；西野ら，2009；小保方・無藤，2006；Stice & Gonzales，1998）や問題行動傾向のある友人との関係（石田・丹村，2012；西野ら，2009；小保方・無藤，2006）など対人関係の要因や、自尊心や信頼感などの個人的要因（天貝，1999；向井，2008；高木・山本・速水，2006）が指摘されてきた。

一般の中学生・高校生における問題行動の兆候を見出そうとする試み

からは、学校生活への適応との関連も示唆されている（西野・氏家・二宮・五十嵐・井上・山本, 2009；小保方・無藤, 2006；高木・山本・速水, 2006）。学業でのストレスや学校内、クラス内でのストレスに対応できず、学校生活が楽しくないという思いが問題行動の背景にあることは想像できる。

さらに、非行少年においては、規範意識の低下が非行行動に影響を与えていると考えられている（内閣府, 2010）が、一般の少年においても、さまざまな問題行動について生徒自身がどの程度悪い、あるいは悪くないと感じているかという規範意識が問題行動に関連しているという指摘（金子, 2012；臼井・橘, 2007；山内, 2004）がある。非行行動の背景要因として、同時に問題行動の抑止力として、予防教育的観点から青少年の規範意識に注目し、その発達を促す試みの重要性は、海外でも指摘されている（Damon, 1999）。日本の青少年の規範意識が低下しているという指摘（大木・神田, 2000；鈴木・櫻井・平出, 2004）をふまえると、規範意識のより詳細な検討も必要と考えられるが、国内の研究はまだ乏しく、取り扱った問題行動の種類や数にも違いがあるため、研究間の比較も容易ではない。廣岡・横矢（2006）は三重県内の小・中・高校生を対象として大規模な規範意識の調査を行っている。その結果、男女ともに学年が上がるにつれて規範意識は低下していた。また、暴力行動や迷惑行動に関しては男子より女子のほうが規範意識が高いものの、「友だち同士で夜おそく外出する」「学校内でお菓子を食べる」といった遊びや快樂志向の行動に関しては男子よりむしろ女子の規範意識が低いことがわかった。中学生を対象に学校生活や家庭生活における規範意識を調査した原田・鈴木（2000）においても、学年が進行するにつれて問題行動の許容度が高まる傾向があり、特に中学2年生と3年生の間で規範意識が低下することがわかった。また、問題行動に対する規範意識は全体的には女子より男子のほうが低いものの、対異性関係やアイドルへの接近行動については女子のほうが許容度が高かった。以上の先行研究から、規範意識に関して性差と学年差が存在し、問題行動

の内容によっても違いがあることが示唆された。

規範意識の形成要因として、両親の養育態度や保護者自身の規範意識による影響は以前から指摘されている（日工組社会安全財団，2001）が、学校や友人と過ごす時間が増え、両親に比べ仲間の相対的な影響力が高まる青年期には、規範意識や問題行動においても友人の影響を受けやすくなることは予想できる。

中学生、高校生において、友人関係や学校生活への満足度が高いことは、規範意識を高めることが報告されている（廣岡・横矢，2006）。しかし、学校生活のどのような側面が重要かについては、具体的にはされていない。そこで本研究では、問題行動の中でも一般の中学生・高校生にとって、日常生活において身近な学校生活における問題行動に焦点をあて、中学生の問題行動に対する意識の実態を調査することを目的とする。本研究においても性別と学年の要因を考慮に入れて中学生の規範意識を検討する。

2. 方 法

2. 1. 調査対象と方法

I県内の公立中学校3校および私立中学校1校の1年生から3年生の合計702名に対し、学校の許可を得て無記名の質問紙調査を実施した。回答に不備のあった19名の調査票を除き、最終的に683名のデータを分析の対象とした。

いずれの協力校においても、クラス担任によりホームルーム等の時間に質問紙を配布し、その場で回答してもらった。調査実施の前に、協力は任意であること、成績等とは一切関係なく、記入された内容は研究以外の目的で使用されることはないことが口頭および書面にて説明された。

2. 2. 調査内容

質問紙は、以下の尺度より構成されていた。

2. 2. 1. 学校生活における規範意識

向井（2008）で使用された問題行動評定の項目と関水（2000）による反社会規範行為の「学校」についての項目等を参考に予備調査項目18項目を作成した。公立校と私立校を含む中学校の教諭計15名に質問紙調査を行い、学校内または登下校中などに観察される問題行動として、それぞれの項目がどの程度あてはまるかを「ほとんどいない」「少しいる」「よくいる」の3段階評定で回答してもらった。さらに、用意した項目以外にも観察される行動があればその内容についての自由記述を求めた。その結果、該当する生徒がほとんどいないと判断された3項目（「刃物などを持ち歩く」、「料金をごまかして電車やバス等に乗る」、「ゲーム等でかけごとをする」）を除外し、自由記述による回答から5つの項目を加えた20項目を「学校生活における規範意識尺度」として使用し、学校生活において問題行動とみられているそれぞれの行動に対して、中学生がどの程度問題視しているかを捉えることを試みた。回答方法は5段階評定で、「全く悪くない」から「非常に悪い」であり、高得点ほど、「悪い」という意識が強い、つまり規範意識が高いことを示す。

2. 3. 2. 学校適応

学校に対する適応度は河村（1999a）の「学校生活満足度尺度（中学生用）」、岡安ら（1992）の「学校ストレスサー尺度」、および河村（1999b）の「スクール・モラル・スケール」の3つの尺度により測定した。これらの尺度は、調査実施時間の制約のため、原版より項目を選択的に抽出して実施した。「学校生活満足度尺度」は、学校生活に対する満足度を測定するもので、「承認」と「被侵害・不適応」の2つの下位尺度から構成されている。河村（1999a）による原版は、「承認」が「私には自分をたよりにしてくれる友人がいる」などの10項目、「被侵害・不適応」は「私は休み時間などにひとりであることが多い」などの10項目からなっているが、本研究では、「承認」の下位尺度より7項目を、「被侵害・不適応」より6項目を選び、計13項目を

実施した。回答の選択肢は、「全くあてはまらない」から「よくあてはまる」の5段階評定である。

「学校ストレス尺度」は、学校生活において感じているストレスの程度を測定するもので、岡安ら（1992）の原版は、37項目で「教師との関係」「友人関係」「部活動」「学業」「規則」「委員活動」の6つの領域でのストレスを測定する下位尺度からなっている。本研究では、16項目を選択し、一部改変して用いた。回答の選択肢は経験頻度（「全然なかった」～「よくあった」）と嫌悪性（「全然いやでなかった」～「非常にいやだった」）について、それぞれ4段階評定で行うものである。得点が高いほど、よりストレスを感じていることを示す。

「スクール・モラル・スケール」は、学校やクラスでの集団生活に対する帰属度、満足度、依存度などを要因とする生徒の主観的な心理状態を測定するもので、河村（1999b）の原版は20項目からなっており、「友人との関係」「学習意欲」「教師との関係」「学級との関係」「進路意識」の5つの下位尺度に分かれている。本研究では12項目を選択して用いた。回答の選択肢は、「よくあてはまる」～「全くあてはまらない」の5件法であり、高得点ほど学校生活におけるその領域でのモラルが高く援助ニーズが低いこと、つまり援助を必要としていないことを表す。

3. 結果

3. 1. 各尺度の因子分析と内的整合性

3. 1. 1. 学校生活における規範意識

予備調査をもとに作成した「学校生活における規範意識尺度」の20項目を因子分析（主因子法、プロマックス回転）した結果、因子負荷量の低かった2項目（「友人とつかみあいのけんかをする」「コンビニなどの前で、地面に座ってものを食べる」）を除き、2つの解釈可能な因子が抽出された（Table 1）。第1因子には「学校に指輪などのアクセサリを身につけて

Table 1. 学校生活における問題行動に対する規範意識の因子分析結果

	I	II
I 校則違反に対する規範意識 ($\alpha = 0.903$)		
学校にマンガや雑誌を持ってくる	0.748	0.183
学校に携帯電話を持ってくる	0.743	0.199
学校に指輪やネックレスなどのアクセサリを身につけてくる	0.730	0.218
学校内でアメやガムなどのお菓子を食べる	0.714	0.292
学校に化粧をしていったり, 下校時に化粧をする	0.704	0.198
先生に服装や髪型, 髪の色を注意されても改めない	0.652	0.444
学校で決められた規則に従わない	0.609	0.413
授業中に携帯電話を使用する	0.548	0.539
先生の言うことに従わない	0.451	0.410
学校の廊下や通学路などを大声で話しながら歩く	0.442	0.176
授業中に友人と(授業に関係のない)話をする	0.440	0.227
II エスカレートした問題行動に対する規範意識 ($\alpha = 0.840$)		
学校のをわざと傷つけたり, こわしたりする	0.225	0.715
テストでカンニングをする	0.136	0.705
授業中にうるさくしたり, 言うことを聞かない	0.351	0.609
理由なく学校を遅刻, 早退, 欠席する	0.306	0.562
先生や友人に嘘をついたり, だましたりする	0.100	0.558
先生に注意されて, 逆ギレする	0.380	0.555
先生にむかって乱暴な言葉を使う	0.455	0.534
二重和	4.984	3.755
寄与率(%)	27.67	20.86

くる」や「学校に(禁止されている)携帯電話を持ってくる」といった項目が含まれ、「校則違反に対する規範意識」(以下「校則違反」と命名した(Cronbachの α 係数=.903)。第2因子は「学校のをわざと傷つけたり壊したりする」や「先生や友人に嘘をついたり, だましたりする」といった項目からなっており、「エスカレートした問題行動に対する規範意識」(以下「問題行動」と命名した(Cronbachの α 係数=.840)。

3. 1. 2. 学校生活満足度

実施した13項目を因子分析(主因子法, バリマックス回転)した結果, 河村(1999a)と同様の2因子が抽出された。因子負荷量が低い1項目(「私は学校に行きたくないときがある」)を除外し, 第1因子を「承認」

(Cronbachの α 係数=.785), 第2因子を「被侵害・不適応」(Cronbachの α 係数=.652) と命名し, 下位尺度として以降の分析に用いた。

3. 1. 3. 学校ストレス

実施した16項目を因子分析(主因子法, バリマックス回転)した結果, 3因子が抽出された。因子負荷量が低かった2項目(「友だちとけんかをした」「学校やクラスの重要な仕事をまかされた」)を除外した。第一因子は, 岡安ら(1992)の「教師との関係」「学業」「規則」の3つの側面が含まれ, 「教師との関係・学業」因子と命名した。第2因子は, 部活動に関する項目からなっており, 「部活動」と命名した。第3因子は, 「いやな仕事や苦手な仕事をやらされた」や「いじめられたり, 仲間はずれにされた」などの項目からなっており, 「友人関係」因子と命名した。それぞれのCronbachの α 係数は, 「教師との関係・学業」因子が.736, 「部活動」が.627 「友人関係」が.558であり, ある程度の信頼性は確認されたと判断した。

3. 1. 4. スクール・モラル・スケール

実施した12項目を因子分析(主因子法, バリマックス回転)した結果, 因子負荷量の低い1項目を除き, 2因子が抽出された。第1因子は, 「クラスの中にいるとホッとしたり, 明るい気分になる」などの項目で, 「対人関係」と命名した(Cronbachの α 係数=.776)。第2因子は, 「授業の内容を理解できている」など学業に関する項目からなっており, 「学習意欲」と命名した(Cronbachの α 係数=.635)。

3. 2. 各尺度得点の性差と学年差

研究で用いたすべての尺度得点を目的変数として, 性別と学年を要因とする二元配置の分散分析を行った。

3. 2. 1. 学校生活における規範意識の性差と学年差

「校則違反」「問題行動」のそれぞれの得点を目的変数とし、性別と学年を要因とする二要因の分散分析を行った。その結果、「校則違反」に対し性別と学年の主効果（性別の主効果： $F(1, 684) = 5.57, p < .05$ ；学年の主効果： $F(2, 684) = 32.18, p < .01$ ）および交互作用（ $F(2, 684) = 3.19, p < .05$ ）が認められた（Table 2）。多重比較（TukeyのHSD法）によれば、「校則違反」については、男子より女子のほうが規範意識が低く、また1年生よりも2、3年生のほうが規範意識が低かった。また、1、2年生においては男子より女子のほうが規範意識が低かったが、3年生では性差は有意ではなかった。

「問題行動」に対しては、学年の主効果のみが認められ（ $F(2, 684) = 16.41, p < .01$ ）、1年生よりも2、3年生のほうが規範意識が低かった。

項目ごとに性差と学年差を検討するために、規範意識の各項目に対し、性別と学年を要因とする二元配置の分散分析を行った。その結果、規範意識のすべての項目に対し、学年の主効果が認められた（Table 3）。性別の主効果が有意であった項目のうち、「校則違反」の項目では、「学校にマンガや雑誌を持ってくる」、「学校内でお菓子を食べる」などの問題行動は、男子より女子の規範意識が特に低く、それぞれ女子のほうが悪いことと考えていないことがわかった。一方、「問題行動」の項目のうち、性差が認められたものは「テストでカンニングをする」、「学校のものをわざと傷つけたり壊したりする」、「先生や友人に嘘をついたりだましたりする」の3

Table 2. 問題行動に対する規範意識の2要因分散分析結果

	1年		2年		3年		主効果(F)		交互作用
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	性別	学年	
校則違反	34.08 (7.29)	30.83 (6.69)	27.87 (9.34)	25.60 (8.48)	28.36 (8.57)	26.14 (7.99)	5.57*	32.18** (男子<女子) (1>2,3)	3.19*
問題行動	23.60 (4.18)	23.07 (3.31)	20.55 (6.14)	21.01 (4.47)	20.15 (5.19)	21.43 (3.89)	<i>n.s.</i>	16.41* (1>2,3)	<i>n.s.</i>

() 内は標準偏差 * $p < .05$, ** $p < .01$

Table 3. 規範意識の各項目の分散分析結果

質問項目	1年		2年		3年		主効果(F)	交互作用	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子			
マンガや雑誌を持つてくる	3.19 (0.94)	2.62 (1.18)	2.42 (1.27)	2.11 (1.05)	1.98 (1.24)	2.08 (1.07)	8.12**	26.71**	4.22*
携帯電話を持つてくる	2.99 (1.11)	2.37 (1.25)	2.34 (1.33)	1.99 (1.22)	1.80 (1.30)	1.94 (1.28)	7.26**	18.12**	4.45*
指輪やネックレスなどのアクセサリーを身につけてくる	3.11 (1.06)	2.79 (1.11)	2.36 (1.26)	2.09 (1.23)	2.46 (1.24)	2.31 (1.16)	6.50**	18.74**	n.s
学校内でアメやガムなどのお菓子を食べる	3.29 (1.00)	2.95 (1.13)	2.55 (1.24)	2.39 (1.27)	2.56 (1.16)	2.39 (1.17)	5.45*	17.08**	n.s
先生に服装や髪型、髪の色を注意されても改めない	3.25 (0.85)	3.26 (0.70)	2.70 (1.12)	2.45 (1.09)	2.54 (0.97)	2.71 (0.97)	n.s	24.28**	n.s
学校で決められた規則に従わない	3.18 (0.78)	3.08 (0.81)	2.76 (1.08)	2.44 (0.94)	2.53 (1.02)	2.56 (0.80)	n.s	20.26**	n.s
授業中に携帯電話を使用する	3.58 (0.76)	3.67 (0.55)	3.01 (1.12)	3.01 (1.08)	2.82 (1.25)	3.13 (0.94)	n.s	22.17**	n.s
先生の言うことに従わない	2.96 (0.91)	2.72 (0.89)	2.48 (1.06)	2.45 (0.82)	2.31 (0.91)	2.47 (0.82)	n.s	12.08**	n.s
学校の廊下や通学路などを大声で話しながら歩く	2.79 (0.75)	2.49 (1.01)	2.30 (1.06)	2.13 (1.12)	2.17 (1.07)	2.01 (0.93)	6.78**	13.40**	n.s
授業中に友人と話をする	2.46 (0.87)	1.97 (0.91)	2.08 (1.16)	2.07 (1.02)	1.64 (1.11)	2.02 (1.03)	n.s	6.62**	7.41**
学校のものやわざと傷つけたり壊したりする	3.64 (0.68)	3.68 (0.57)	3.15 (1.06)	3.35 (0.77)	3.19 (0.95)	3.36 (0.71)	4.23*	13.40**	n.s
テストでカンニングをする	3.71 (0.64)	3.88 (0.36)	3.31 (1.16)	3.50 (0.86)	3.41 (0.93)	3.57 (0.77)	6.20*	10.29**	n.s
授業中にうるさくしたり、言うことを聞かない	3.28 (0.77)	3.26 (0.64)	2.85 (1.01)	2.88 (0.84)	2.90 (1.06)	3.00 (0.83)	n.s	10.67**	n.s
理由なく学校を遅刻、早退、欠席する	3.17 (0.87)	3.18 (0.78)	2.77 (1.16)	2.65 (1.11)	2.58 (1.11)	2.68 (1.09)	n.s	13.00**	n.s
先生や友人に嘘をついたり、だましたりする	3.31 (0.82)	3.11 (0.92)	2.85 (1.15)	3.13 (0.84)	2.76 (1.05)	3.17 (0.87)	4.68*	3.27*	4.82**
先生に注意されたりして、逆ギレする	3.21 (0.98)	2.83 (1.10)	2.73 (1.19)	2.70 (1.11)	2.64 (1.16)	2.83 (1.08)	n.s	4.06*	n.s
先生にむかって乱暴な言葉を使う	3.29 (0.83)	3.12 (0.80)	2.90 (1.08)	2.80 (0.96)	2.67 (1.07)	2.82 (0.93)	n.s	10.48**	n.s

() 内は標準偏差 * $p<0.05$, ** $p<0.01$

項目であり、いずれも男子のほうが規範意識が低かった。

3. 2. 2. 学校適応の性差と学年差

学校生活満足度の「承認」に対しては、性別の主効果 ($F(1, 684) = 9.12, p < .01$) と学年の主効果 ($F(2, 684) = 9.60, p < .01$) が認められ、男子より女子のほうが、また1年生のほうが2、3年生よりも有意に得点が高かった。「被侵害・不適応」に対しては、学年の主効果 ($F(2, 684) = 4.49, p < .05$) のみが認められ、3年生が1年生よりも有意に高かった。交互作用はいずれも有意には至らなかった。2つの下位尺度のいずれにおいても1年生より3年生の満足度が低く、一方、友人関係における承認を中心とする満足度は、男子より女子のほうがより高いことがわかった。学校ストレス尺度においては、「教師との関係・学業」の下位尺度に対してのみ性別と学年の主効果が認められた(性別の主効果: $F(1, 684) = 21.54, p < .01$; 学年の主効果: $F(2, 684) = 5.54, p < .01$)。1年生よりも2、3年生のほうが有意に高いストレスを報告していたことは、学校生活満足度尺度の結果と同様であった。教師との関係や学業の側面では、男子よりも女子のほうが有意に高いストレスを報告していた。

スクール・モラル・スケールの「対人関係」に対しては、性別と学年の主効果および交互作用が有意であった(性別の主効果: $F(1, 684) = 7.89, p < .01$; 学年の主効果: $F(2, 684) = 22.72, p < .01$; 交互作用: $F(2, 684) = 3.84, p < .05$)。多重比較(TukeyのHSD法)の結果、全体的に、男子より女子のほうがモラルが高く(援助ニーズが低く)、特に3年生男子のモラルが有意に低いことがわかった。「学習意欲」に対しては、学年の主効果のみ ($F(2, 684) = 17.08, p < .05$) が認められ、1年生が2、3年生よりモラルが高く、援助ニーズが低かった。

3. 3. 問題行動に対する規範意識の関連要因とその性差

本研究で用いた変数間のピアソンの相関係数を算出したところ、学校ス

トレスの「友人関係」を除くすべての学校適応に関する変数において、規範意識との有意な関連が認められた (Table 4)。次に、規範意識の2つの下位尺度 (「校則違反」と「問題行動」) を従属変数とし、有意な相関が認められたすべての変数 (学校生活満足度の「承認」と「被侵害・不適応」、スクール・モラル・スケールの「対人関係」と「学習意欲」、学校ストレス尺度の「教師との関係・学業」と「部活動」) を独立変数として、男女別に強制投入法で重回帰分析を行った。

男子においては、「校則違反」に対しても、「問題行動」に対しても、学校生活満足度の「承認」(校則違反： $\beta = .252, p < .01$ ；問題行動： $\beta = .248, p < .01$) とスクール・モラル・スケールの両方の下位尺度 (「対人関係」(校則違反： $\beta = .237, p < .01$ ；問題行動： $\beta = .255, p < .01$)；「学習意欲」(校則違反： $\beta = .244, p < .01$ ；問題行動： $\beta = .253, p < .01$) が有意な正の関連を示しており、学校ストレスの「教師との関係・学業」は負の関連 (校則違反： $\beta = -.137, p < .05$ ；問題行動： $\beta = -.149, p < .01$) を示していた (Table 5)。つまり、学習意欲が高いこと、友人や教師との関係が良好であること、学業面でのストレスが低いこと、また学校で「承認」されていると感じ満足度が高いことは、男子では規範意識につながっているといえよう。

一方、女子においては、「校則違反」に対しても「問題行動」に対して

Table 4. 変数間の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8
1 承認・満足	-							
2 被侵害・不適応	-.37**	-						
3 クラス・対人関係	.68**	-.38**	-					
4 学習意欲	.36**	-.12**	.37**	-				
5 教師との関係・学業				-.19**	-			
6 部活動		.10**	-.10**	-.10**	.27**	-		
7 友人関係	-.14**	.38**	-.19**	-.08*	.34**	.23**	-	
8 校則違反			.12**	.28**	-.25**	-.09*		-
9 問題行動	.10*	.09*	.18**	.34**	-.17**	-.09*		.69**

* $p < .05$, ** $p < .01$

1, 2は「学校生活満足度」、3, 4は「スクール・モラル」、5, 6, 7は「学校ストレス」、8, 9は「学校生活における規範意識」の各尺度の下位尺度

Table 5. 問題行動に対する規範意識の関連要因 (重回帰分析結果)

独立変数	従属変数	
	校則違反	問題行動
学年	-.221**/-.162**	<i>n. s./n. s.</i>
承認	.252**/ <i>n. s.</i>	.248**/ <i>n. s.</i>
被侵害・不適応	<i>n. s./n. s.</i>	<i>n. s./n. s.</i>
クラス・対人関係	.237**/ <i>n. s.</i>	.255**/ <i>n. s.</i>
学習意欲	.244**/.175**	.253**/.299**
教師との関係・学業	-.137*/-.209*	-.149**/ <i>n. s.</i>
部活動	<i>n. s./-.106*</i>	<i>n. s./-.114**</i>
R^2	.228/.153	.179/.155

* $p < .05$ ** $p < .01$

/の左側は男子, 右側は女子の標準偏回帰係数

も, 学校生活満足度の関連は有意ではなく, スクール・モラル・スケールの「対人関係」も有意に関連していなかった。スクール・モラル・スケールの「学習意欲」が正の関連(校則違反: $\beta = .175, p < .01$; 問題行動: $\beta = .299, p < .01$)を示していたことは男子における結果と同様であった。しかし, 男子とは異なり, 学校ストレス尺度の「部活動」が女子ではいずれの規範意識とも関連していた(校則違反: $\beta = -.106, p < .05$; 問題行動: $\beta = -.114, p < .01$)。つまり, 女子では, 学習意欲が高いことが高い規範意識と関連するものの, 部活動でのストレスは規範意識を低下させる可能性があるといえよう。

4. 考 察

本研究は, 中学生を対象として, 学校生活における問題行動をそれぞれの程度悪く感じているかを問う方法で, 校則違反のような身近な問題行動に対する意識とより深刻と考えられるエスカレートした問題行動に対する意識の2つの側面に分けて規範意識の性差, 学年差を明らかにしようと試みた。さらに, 問題行動を悪く考える意識と学校適応との関連を学校生活満足度, 学校ストレス, およびスクール・モラルの各側面により

検討した。

4. 1. 中学生の問題行動に対する意識の性差，学年差について

問題行動に対する意識は，校則違反など身近な問題行動についても，より問題性の高い行動についても，学年があがるにつれて「悪くない」と答える傾向が強く，したがって規範意識が低下することがわかった。これは，先行研究（原田・鈴木，2000；廣岡・横矢，2006）の結果と一致する方向である。また，中学生に問題行動経験の自己報告を求めた過去の研究（向井，2008）において，1年生より2，3年生のほうが身近な問題行動を多く報告していたことから，規範意識の低下と実際の問題行動の経験頻度は相互に関連する可能性も考えられる。ただし，暴力やものを壊すなどより深刻な問題行動経験は，学年による差は少なく，規範意識と実際の経験との関連についてはさらに検討する必要がある。

高校生では，規範意識は一般に男子より女子のほうが高く，つまり女子のほうが反社会的行動を「悪い」「許されない」と考えることが報告されている（関水，2000）が，本研究で対象とした中学生においては，問題行動の内容によりその傾向に違いがあることが明らかになった。たとえば，「学校内でアメやガムなどのお菓子を食べる」ことや「授業中に携帯電話を使用する」といった校則違反などの身近な問題行動に対しては，3年生では性差は認められなかったものの，1，2年生では男子よりむしろ女子に「悪くない」という意識が強かった。これらは，中学生を対象とした先行研究（原田・鈴木，2000；廣岡・横矢，2006）を追認する結果となった。暴力行動以外の逸脱行動に対する関心は，むしろ女子のほうが強いという報告（小嶋・松田，1999）もあることから，軽度の逸脱行動に対する規範意識は男子よりもむしろ女子において低いことが考えられる。ただし，実際の問題行動の経験数は，女子よりも男子のほうが多く報告していた（向井，2008）こともふまえると，中学生の女子では，問題行動を許容する意識は必ずしも経験には結びつかないのかもしれない。石田・丹村（2012）も，

規範意識に関わらず逸脱行動を行う傾向が男子は女子よりも強いことを報告している。規範意識の高さは問題行動を抑制すると指摘されているが(金子, 2012), 両者の関連のあり方も男女で異なる可能性があり, 衝動性など媒介すると考えられる要因を含めて検討していく必要がある。

一方, 「先生に注意されて, 逆ギレする」といった, より深刻な問題行動に対する規範意識に性差は認められなかった。つまり, より問題性の高い行動を男子も女子と同程度には「悪い」と認識している。しかし, これらの問題行動の経験は男子のほうが女子よりも多く報告していた(向井, 2008)。喫煙や飲酒などの不良行為経験がある中学生や, 補導経験のある非行少年は, 女子より男子のほうが多い。校則違反程度ではなくより問題性の高い行動において, 規範意識と行動のずれが女子より男子により多い理由を検討することによって, 学年や性別を考慮したより効果的な予防教育につなげていくことが重要である。

4. 2. 問題行動に対する意識と学校適応

本研究の結果, 学校適応が良好であるほど規範意識は高いという傾向が全体としては読み取れた。しかし, 男女で, また問題行動が身近なものか, より深刻なものかによっても, 規範意識と学校適応との関連のあり方が異なる可能性も示唆された。男女に共通していえることは, 学習意欲の高さは全般的な規範意識の高さにつながっていること, 校則違反のような比較的身近な問題行動に対する規範意識は, 教師との関係や学業でのストレスが少ないほど高いことであった。男子では学校生活に満足しているほど, クラスの対人関係が良好であるほど, 問題行動への規範意識は高かった。他方, 女子では, 学校生活での満足度やクラスでの対人関係の良好さによる規範意識への影響は認められず, むしろ部活動でのストレスが規範意識を低下させる要因である可能性が示唆された。

これまでの研究で, 部活動でのストレスと問題行動の関連を直接検討した研究はみあたらないが, 大学生を対象に中学校の時期について回顧的

に行った調査によれば、部活動への参加が居場所感を促進し、規範意識にも結び付くこと（郡司・伊藤，2010）が報告されている。また、部活動への積極的な取り組みは学校生活適応感に関連する（岡田，2009）との指摘もある。男子では部活動でのストレスが規範意識に関連していなかったのに対し、女子で関連していたことは興味深い。男子では部活動よりもクラスでの満足度が規範意識と関連し、女子ではクラスよりも部活動がより重要な意味をもつと考えられる。

一般的に、中学生女子の仲間集団は男子の仲間集団より小規模でかつ閉鎖的であり、女子の規範意識は所属する仲間集団の規範意識との類似性が男子より高いことが指摘されている（石田・丹村，2012）。女子の規範意識は仲間の規範意識の影響を男子以上に受けやすいことも示唆されている。

一方、米国の青少年を対象とする研究（Steinberg & Monahan, 2007）によれば、仲間からの同調への圧力に抵抗する傾向は男子より女子のほうが高く、アジア系の青年は他の民族グループに比べて弱いという。仲間から同調を求められる行動、あるいは同調へのプレッシャーを感じる行動の内容と同調への抵抗力によっても、規範意識が行動に影響する程度は変わりうると考える。特に女子にとって、部活動が居場所として機能するのかストレス要因となるのかによっても、規範意識への影響のあり方が異なることは予想できる。今後の研究では、同級生との仲間集団だけでなく、先輩や後輩との関係も考慮に入れる必要があるだろう。

本研究は横断的調査であったため、問題行動に対する意識と学校適応の間の因果関係については言及できない。規範意識の高さが学校適応を促進するのか、学校適応が良好であることが規範意識を高めるのか、そしていずれの場合も問題行動の抑制につながるのかを明らかにすることは今後の課題である。

青少年による犯罪や問題行動の予防は、国内だけでなく海外においても重要な問題であり、規範意識を向上させることで実際に問題行動を抑制で

きるのか、そもそも規範意識をどのように変容させることができるのかは、青年期研究の課題である (Damon, 1999)。道徳心や共感能力など向社会性の発達を明らかにしようとする試みは幼児期を中心に盛んになってきたが、中学生や高校生を対象とする研究はまだ乏しい。青年期の規範意識を向上させるメカニズムを明らかにするためには、青年期の親子関係や友人関係の特徴をふまえ、同調や逸脱行為へのピア・プレッシャーも考慮に入れたうえで、青年期の自我の発達を検討する必要があるだろう。

5. 引用文献

- 天貝由美子 1999 一般高校生と非行少年の信頼感に影響を及ぼす経験要因 教育心理学研究, **47**, 229-238.
- 鮎川潤 2001 少年犯罪 平凡社新書
- Damon, W. 1999 The moral development of children. *Scientific American*, **28**, 72-88.
- 郡司惇史・伊藤裕子 2010 部活動への関与による問題行動傾向の抑制効果 文京学院大学人間学部研究紀要, **12**, 133-140.
- 原田唯司・鈴木勝則 2000 中学校における生徒・保護者・教師の規範意識の比較検討. 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇) 第50号, 267-283.
- 廣岡秀一・横矢祥代 2006 小学生・中学生・高校生の規範意識と関連する要因の分析 三重大学教育学部研究紀要, **57**, 111-120.
- 石田靖彦・丹村明寿香 2012 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりが学校における規範意識と逸脱行為に及ぼす影響 愛知教育大学研究報告(教育科学編), **61**, 117-125.
- 金子泰之 2012 問題行動抑止機能と向学校的行動促進機能としての中学校における生徒指導—一般生徒と問題生徒の比較による検討—. 教育心理学研究, **60**, 70-81.

- 河村茂雄 1999a 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発(1)—学校生活満足度尺度(中学生用)の作成— カウンセリング研究, **32**, 274-282.
- 河村茂雄 1999b 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発(2)—スクール・モラル尺度(中学生用)の作成— カウンセリング研究, **32**, 283-291.
- 小嶋佳子・松田文字 1999 中学生の暴力に対する欲求・規範意識, 加害・被害経験, および学校適応感 広島大学教育学部紀要(心理学), **48**, 131-139.
- 文部科学省 2013 平成25年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について 文部科学省 2013年10月 <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/1351936.htm> (2014年12月26日)
- 向井隆代 2008 中学生の問題行動と両親の養育態度との関連 臨床発達心理学研究, **7**, 54-63.
- 内閣府政策統括官 2010 第4回非行原因に関する総合的研究調査 2010年3月 http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikou4/pdf_index.htm
- 日工組社会安全財団 2001 青少年の規範学習と逸脱抑制に関する研究 調査研究事業報告書.
- 日本青少年研究所 2009 中学生・高校生の生活と意識 日本・アメリカ・中国・韓国の比較
- 西野泰代・氏家達夫・二宮克美・五十嵐敦・井上裕光・山本ちか 2009 中学生の逸脱行為の深化に関する縦断的検討 心理学研究, **80**, 17-24.
- 小保方晶子・無藤隆 2006 中学生の非行傾向行為の先行要因—1学期と2学期の縦断調査から— 心理学研究, **77**, 424-432.
- 岡田有司 2009 部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響—部活動のタイプ・積極性に注目して— 教育心理学研究, **57**, 419-431.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森 俊夫・矢富直美 1992 中学生の学

向井 隆代

校ストレスラーの評価とストレス反応との関係. *心理学研究*, **63**, 310-318.

大木桃代・神田信彦 2000 中学生の問題行動に対する意識とストレス反応 人間科学研究, 22.

関水しのぶ 2000 規範的意識についての研究(1) —高校生の反社会規範的行動に対する二重構造的な意識について— 日本教育心理学会第42回発表論文集, 220.

Stienberg, L., & Monahan, K.C. 2007 Age differences in resistance to peer influence. *Developmental Psychology*, **43**, 1531-1543.

Stice, E., & Gonzales, N. 1998 Adolescent temperament moderates the relation of parenting to antisocial behavior and substance use. *Journal of Adolescent Research*, **13**, 5-31.

鈴木有美・櫻井健多・平出彦仁 2004 青年期における問題行動と精神的健康 中部大学人文学部研究論集, **11**, 109-133.

高木邦子・山本将士・速水敏彦 2006 高校生の問題行動の規定因の検討 —有能感, 教師・親・友人関係との関連に着目して— 名古屋大学大学院教育発達科学研究, **53**, 107-120.

臼井茉莉・橘 真彦 2007 中学生における規範意識とそれに影響を及ぼす要因 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, **30**, 165-173.

山内祐司 2004 学校の問題行動抑制機能—ボンド理論の再構成と実証の試み— 犯罪社会学研究, **29**, 114-126.

付記

本論文の基礎資料となった調査にご協力を賜りました各校の先生方ならびに生徒の皆さんに、深く感謝申し上げます。